



74巻8号



検証「パンデミック インフルエンザ 2009」

2009年の春、豚由来と呼ばれる新型インフルエンザのアウトブレイクがメキシコ等から報告されました。流行はあっという間に全世界に広がり、6月にはWHO(世界保健機関)が世界的大流行(パンデミック)を宣言。それから早くも1年以上が経過しました。

鳥インフルエンザウイルス(A/H5N1)から変異した高病原性の新型インフルエンザのアウトブレイクを想定して行動計画を作成し、発熱外来の準備や医療体制確保等の訓練を実施してきた国、地方公共団体およびその関係機関(保健所等)にとって、パンデミック宣言の時点でも高病原性でなかったことは幸いでした。しかし、国内侵入警戒当初における空港での厳格な検疫や、患者の入院隔離等の対策が、パンデミック宣言後に批判的に評価されたり、新型インフルエンザ対策に関する政府の「基本的対処方針」および医療の確保や学校の臨時休業等に関する「運用指針(厚労省)」に基づく対策が地域によってはうまく機能しないなど、様々な課題が浮き彫りになりました。

また、新型ウイルスに対しては、大部分の人が防御免疫を持たないため、新しい予防ワクチンへの期待が高まる一方、ワクチン供給に限りがあったこと、および流行拡大期に起こった歴史的な政権交代なども影響して、その接種回数や優先接種対象者の設定などに関する政府の意思決定プロセスにも混乱が見られました。

そこで本号では、新型インフルエンザ、すなわち「パンデミックインフルエンザ(H1N1)2009」の疫学的・臨床的な特徴に関する評価・分析、国内外における対策面の検証を踏まえた課題とその解決策に関する提案、および新型ワクチンの効果等の検証と今後のワクチン開発に関する展望などについて、インフルエンザの専門家や、保健所等の公衆衛生の第一線でご活躍の方々にご執筆いただきました。

特集テーマの冒頭には、「検証」の2文字を入れました。しかし、検証と言っても、対策面の失敗や問題点を追及する姿勢ではなく、将来に向けた教訓を求める姿勢と多角的視点から、課題分析と前向きなご提案をいただきました。